

5.4 「特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用に関するよくある質問と答え (FAQ)」について

教育支援部 主任研究員 徳永亜希雄

平成 21 年度特別支援教育研究研修員 加福千佳子

(青森県立弘前第一養護学校 教諭)

平成 21 年度特別支援教育研究研修員 小林 幸子

(静岡県立中央特別支援学校 教諭)

教育支援部 総括研究員 松村 勘由

はじめにー開発の趣旨ー

本研究の前身である ICF-CY 関連研究 (2008) や「2.3」で述べた今回の特別支援学校を対象とした悉皆調査の結果 (2009) から、活用方法だけでなく、ICF 及び ICF-CY やその活用についての基本的な理解啓発を促す必要があるということが指摘されています。筆者は、経験上、研修等の場で直接尋ねられる質問は、多様でありながら、一方で、それらの質問の中には、よく尋ねられる類似したものがあると感じてきました。また、「はじめに」で述べたとおり、本研究所の研修に参加する教職員や全国の学校現場で出会う教職員の声、電話や電子メールでの問い合わせ、研修会の講師依頼等の動きと接するにつけ、ICF 及び ICF-CY への関心や活用のニーズはますます高まるのではないかと感じています。

これらに応えることのできるツールの一つとして、「よくある質問と答え (FAQ)」を考えましたが、特別支援教育に特化した、具体的なものは見当たりませんでした。そこで、本研究では「特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用に関するよくある質問と答え (FAQ)」を開発し、Web サイトでの公開を目指して取り組むことにしました。

1 FAQ 開発のための手続き

本研究で FAQ の開発を開始するに当たり、以下の三つの資料を元にしながら、複数のスタッフで質問事項の設定と回答の作成を行いました。

- ①本研究所の専門研修における ICF 及び ICF-CY 関連講義後の意見・質問、その後実施した自主学習会の資料
(※講義内容については別紙資料参照)
- ②ある特別支援学校での ICF 及び ICF-CY 関連研修会での協議内容
- ③研究研修を進める上での疑問等

2 FAQに含まれる主な内容

前述の三つの資料をもとにして検討したFAQの内容は以下のとおり、大きく三つに分けて整理しました。その一部以下に紹介します。詳細は本研究のWebサイトをご覧ください。http://www.nise.go.jp/blog/2009/05/post_202.html

(1) ICF及びICF-CY そのものについて

- ① 「ICF」とは何ですか？
- ② 「ICF」と「ICIDH」の違いは何ですか？
- ③ ICFの説明の中ででてくる「医学モデル」と「社会モデル」、そして統合したモデルとはどういうことですか？ 他

(2) 特別支援教育における活用について

- ① ICFやICF-CYを活用することのメリットは何ですか？
- ② 特別支援学校学習指導要領解説書にある「ICFの考え方」について教えて下さい。
- ③ 特別支援学校におけるICFにはどのような使い方がありますか？ 他

(3) 活用の方法について

- ① ICFやICF-CYを活用する方法にはどのようなものがありますか？
- ② 「ICF関連図」とは何ですか？どのように使うのですか？
- ③ ICFチェックリストとはどのようなものですか？ 他

3 今後に向けて

前述のとおり、ICF及びICF-CYへの関心や活用のニーズはますます高まることを予想して、ICF及びICF-CYの実際の活用を支えるツールの一つとして今回のFAQ（試案）を作成しました。質問内容を作るもととした資料、質問内容や回答の書き方等、さらに改善充実を図っていく必要があるのではないかと考えています。また、FAQの効果についても実証を重ね、よりよいものを検討していく必要があると考えています。

文献

- 1) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 (2008). 課題別研究報告書 (平成18~19年度) ICF 児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究.
- 2) 松村勘由, 加福千佳子, 徳永亜希雄, 小林幸子 (2009). 特別支援学校におけるICF及びICF-CYについての認知度・活用状況等に関する調査 調査のまとめ (速報) http://www.nise.go.jp/PDF/H21kenkyu_ICFCY_chousamatome.pdf

(参考)平成21年度第1期専門研修講義
「ICFの視点から見た肢体不自由のある子どもの理解
と支援計画作成の実際」資料を一部改編



徳永亜希雄

教育支援部 主任研究員

* 専門研究A「特別支援教育におけるICF-CYに関する実際研究(平成20~21年度)」研究代表
* 科学研究費補助金「特別支援教育における国際生活機能分類児童青年期版活用のための
研修パッケージ」研究(平成20~22年度)」研究代表
* 厚生労働省「生活機能分類—小児青少年版(仮称)—(ICF-CY)の
日本語版作成のための検討会」構成員

導入 「障害観」としてのICF

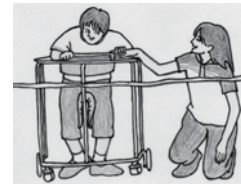
「ご自身の見方と向き合きましょう。」

本日の目的と構成

自身の見方に引きつけながら、ICFの視点から見た
肢体不自由等のある子どもの理解について考え、個
別の教育支援計画等でのICF/ICF-CYの活用について
検討していただくこと

1. 新学習指導要領等でのICFに関する記述とICF/ICF-CY
の概要について
2. 特別支援教育におけるICF/ICF-CY活用の実際
—個別の教育支援計画を中心に—

1. 新学習指導要領等での ICFに関する記述と ICF/ICF-CYの概要について



新学習指導要領等解説書案における ICFの位置づけ

- ★障害のとらえ方と関連づけるものとして
(同自立活動編案)
- ★個別の教育支援計画での関係者間での実態把握と
共通理解の参考として
(同総則編)

(特別支援学校学習指導要領等解説書案より抜粋・要約)

障害のとらえ方とICFと学習指導要領

- 特別支援教育での指導の対象となる「障害による学
習上又は生活上の困難」は、ICFとの関連でとらえる
ことが必要。
- すなわち、「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」
といった生活機能とそれらに障害のある状態を相互
に関連させながら把握することが大切。
- そして、「個人因子」や「環境因子」等のかかわりな
ども踏まえて、個々「学習上又は生活上の困難」を
把握したり、その改善・克服を図るための指導の方
向性や関係機関等との連携の在り方などを検討し
たりすることが求められる。

(特別支援学校学習指導要領等解説書案より抜粋・要約)

ICF (国際生活機能分類) とは何か

International Classification of Functioning, Disability and Healthの略。人間の生活機能と障害に関する状況を記述することを目的とした分類であり、健康状態、心身機能、身体構造、活動と参加、環境因子、個人因子から構成される。2001年にWHO(世界保健機関)において採択された。

(中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申) H20. 1より)

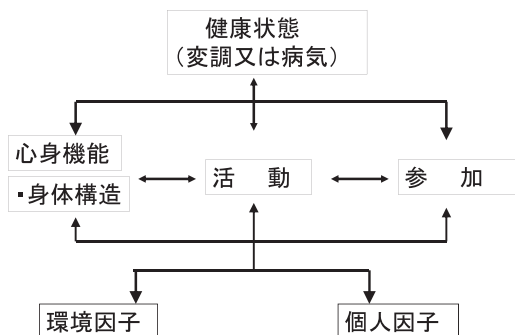
7

(続) ICF とは何か

- 2002年日本語訳 副題には
-国際障害分類改定版-
- 障害のある人だけでなく、全ての人を対象としたもの
- 合計1424項目の分類項目(但し、健康状態、個人因子を除く)
- WHO-FIC(国際分類ファミリー)の一つに位置づく。

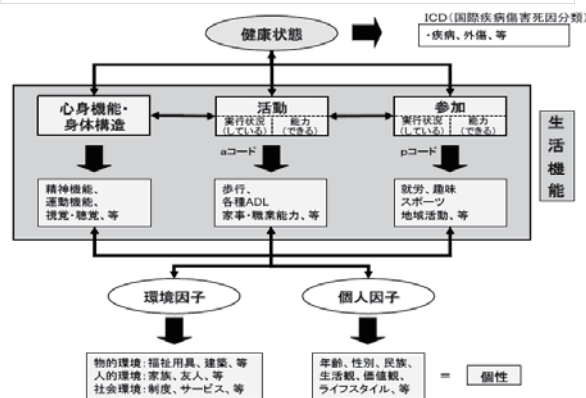
8

ICFの概念図: 「ICFの構成要素間の相互作用の図」



9

解説書案に引用された、具体例が入った概念図



(前頁図の補足説明)

- 「aコード」、「pコード」とは、活動の参加の項目を活動として用いる場合は頭文字をaとし、参加として用いる時はpとして用いることを表したものです。
- 「実行状況」とは現在の環境のもとで実際に「している」活動又は参加の状況を表し、「能力」とは「できる」活動又は参加を表している。

ICFの概念的枠組みの理解

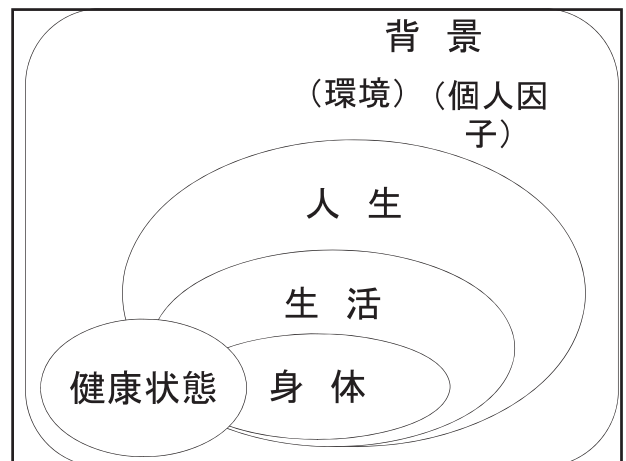
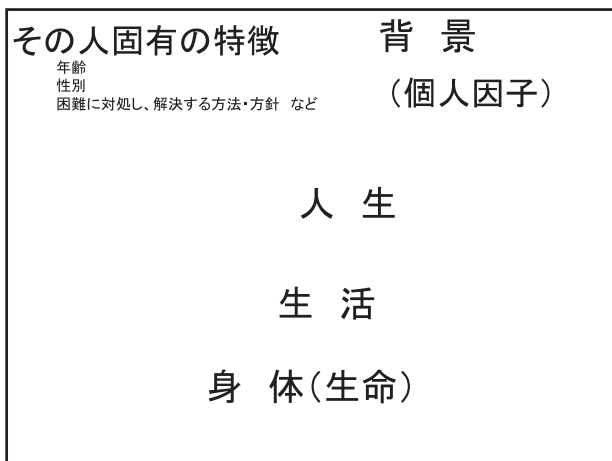
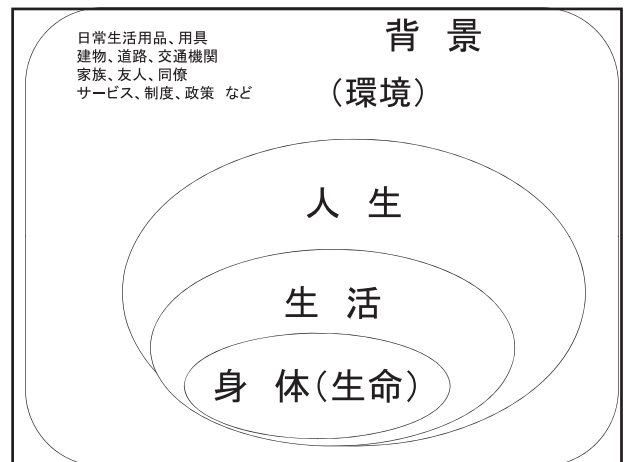
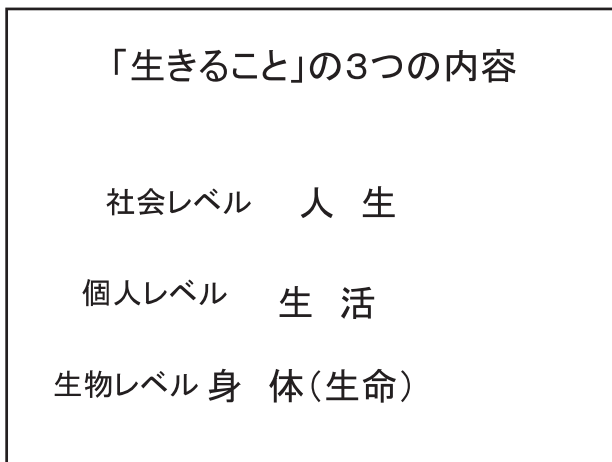
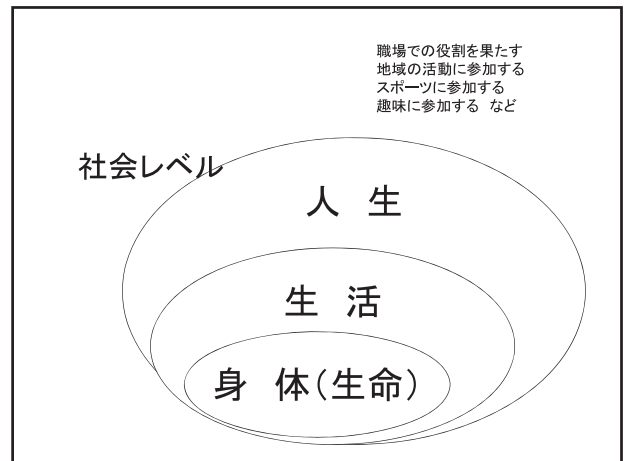
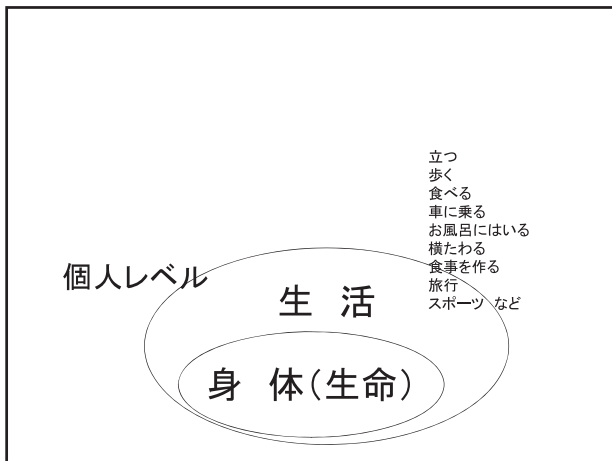
～人が「生きること」について考える

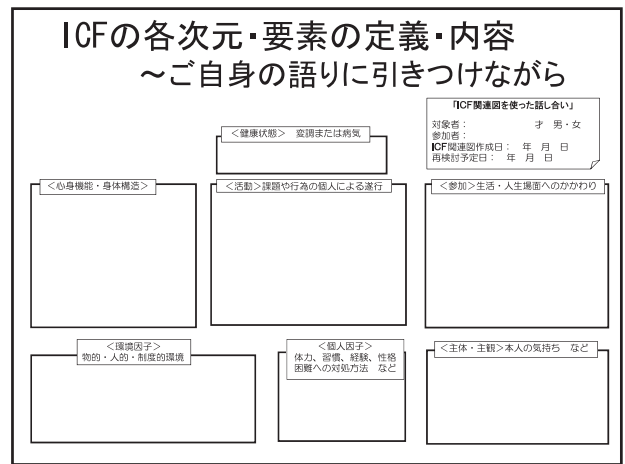
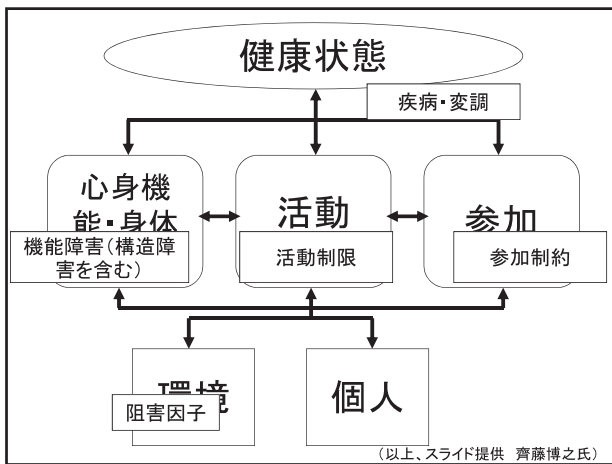
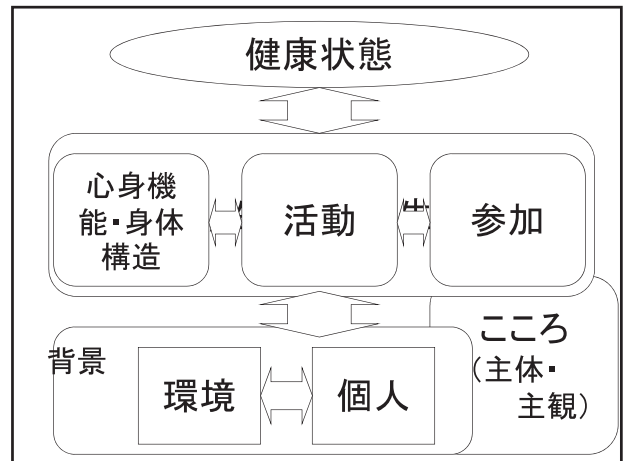
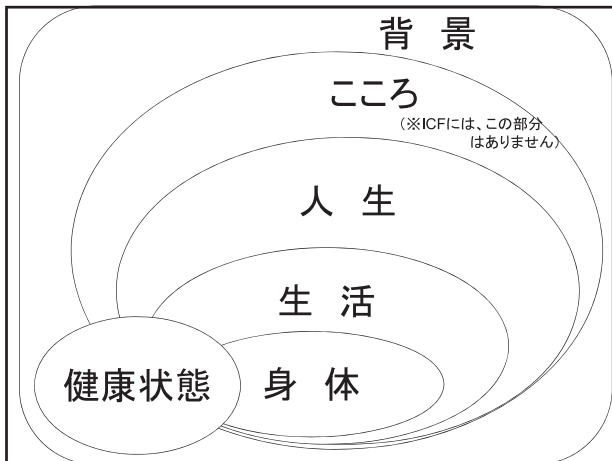
(スライド提供 研究協力者 齊藤博之氏@山形)

生物レベル

身体(生命)

手足...筋骨格系脳.....神経系
心臓.....心血管系
肺.....呼吸器系
など





ICFの各次元・要素の定義・内容

心身機能: 身体系の生理的機能(心理的機能を含む)

身体構造: 器官、肢体とその構成部分などの、身体の解剖学的部分

機能障害(構造障害を含む): 著しい偏異 や喪失などといった、心身機能または 身体構造上の問題

23

心身機能(第1レベル)

第1章 精神機能

第2章 感覚機能と痛み

第3章 音声と発話の機能

第4章 心血管系・血液系・免疫系・呼吸器系の機能

第6章 尿路・性・生殖の機能

第7章 神経筋骨格と運動に関連する機能

第8章 皮膚および関連する構造の機能

24

身体構造(第1レベル)

- 第1章 神経系の構造
- 第2章 目・耳および関連部位の構造
- 第3章 音声と発話に関わる構造
- 第4章 心血管系・免疫系・呼吸器系の構造
- 第5章 消化器系・代謝系・内分泌系に関連した構造
- 第6章 泌尿生殖器系および生殖系に関連した構造
- 第7章 運動に関連した構造
- 第8章 皮膚および関連部位の構造

25

各次元・要素の定義

活動: 課題や行為の個人による遂行

参加: 生活・人生場面への関わり

(※「参加」と「活動」の項目は分けられていない)

活動制限: 個人が活動を行うときに生じる難しさ

参加制約: 個人が何らかの生活・人生場面に関わるときに経験する難しさ

26

活動と参加(第1レベル)

- 第1章 学習と知識の応用
- 第2章 一般的な課題と要求
- 第3章 コミュニケーション
- 第4章 運動・移動
- 第5章 セルフケア
- 第6章 家庭生活
- 第7章 対人関係
- 第8章 主要な生活領域
- 第9章 コミュニティライフ・社会生活・市民生活

27

各次元・要素の定義

環境因子: 人々が生活し、人生を送っている物的・社会的・態度的環境(※マイナスである阻害因子だけでなく、プラスとなる促進因子にもなりうる)

個人因子: 個人の人生や生活の特別な背景(※具体的な分類項目はありません)

健康状態: 必要に応じてICD(「疾病及び関連保健問題の国際統計分類」: International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems)のコードを使用。

環境因子(第1レベル)

- 第1章 生産品と用具
- 第2章 自然環境と人間がもたらした環境変化
- 第3章 支援と関係
- 第4章 態度
- 第5章 サービス・制度・政策・社会生活・市民生活

29

ICF-CY(ICF児童版)について①

○ICIDH改訂段階での児童タスクフォースからの指摘

(WHOレベル)

○子どもたちへの活用における不十分さへの指摘。

いわゆる障害の重い子に対応する項目の少なさ等

(日本での取組の中から)

○2002年～ WHO ICF-CYワーキンググループを中心とした検討

○2006年10月 WHO-FIC(国際分類ファミリー)での承認

○2007年10月 WHOから公表

○2008年6月 厚生労働省内の検討会で翻訳について検討開始

○2009年 ICF-CY日本語訳刊行

ICF-CYについて①

- 対象 18歳未満(国際条約等に準拠)
- ICFの派生分類としての位置付け
- 既存のICFをベースにした検討作業
- 定義の説明文の修正や拡充、
- 新しい内容の未使用のコードへの割り当て
- 「含まれるもの」、「除かれるもの」の基準の修正、
- 発達面を含めるための評価点の拡充記述内容の修正や拡張

ICF-CYについて③

<具体的追加項目>

ICFでの項目

・d9200

ICF-CYで追加された項目(仮訳)

・d880 遊びへの取組

・d8800 ひとり遊び

・d8801 傍観的遊び

・d8802 並行遊び

・d8803 共同遊び など

より詳細な分類で子どものことが記述しやすくなった。

ICF→ICF-CYの活用へ

(参考)「国際的な障害観の変化」

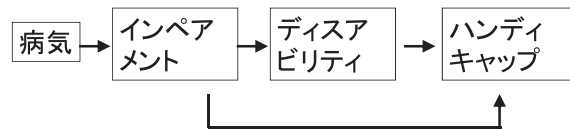
障害のある児童生徒の教育については、自立や社会参加のための基本的な力を培うために障害の状態に応じて行う教科指導に加えて、自立活動の指導、すなわち、障害に起因して生じる種々の困難の改善・克服のための指導という重要な機能がある。

この機能に関しては、近年の国際的な障害観の変化も踏まえれば身体機能や構造の欠陥を補うという視点で捉えることは適切ではなく、生活や学習上の困難や制約を改善・克服するために適切な教育及び指導を通じて、障害のある児童生徒の主体的な取組の支援を行うことを特別支援教育の視点として考えていく必要がある。

(「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」H15.3.28より)

変化する前のICIDH(International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps,国際障害分類,1980)について

概念図



34

ICIDH(国際障害分類)と養護・訓練

「インペアメント」は、身体の器質的損傷又は機能不全で、疾病等の結果もたらされたものであり、医療の対象となるもの

「ディスアビリティ」は、「インペアメント」などに基づいてもたらされた日常生活や学習上の種々の困難であって、教育によって、改善し、又は克服することが期待されるもの

「ハンディキャップ」は、「インペアメント」や「ディスアビリティ」によって、一般の人々との間に生じる社会生活上の不利益であり、福祉施策等によって補うことが期待されるもの

(特殊教育諸学校学習指導要領の解説書(H4.5)より)

35

ICIDH(国際障害分類)と養護・訓練 その2

養護・訓練の指導によって改善し、又は克服することが期待される障害は、主として「ディスアビリティ」の意味での障害である。

養護・訓練は、自己認知、環境の認知、身辺処理、コミュニケーション活動、移動・方向、作業等における「ディスアビリティ」を改善し、又は克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、それによって障害に基づく発達上の遅滞や種々の困難を補い心身の調和的発達を促すことを目的とする

(特殊教育諸学校学習指導要領の解説書(H4.5)より)

36

(参考) 肢体不自由のある子どもとは？

学校教育法施行令第22条

視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者、肢体不自由者又は病弱者の障害の程度は、次の表に掲げるとおりとする。

肢体不自由者

- 1 肢体不自由の状態が補装具の使用によつても歩行、筆記等日常生活における基本的な動作が不可能又は困難な程度のもの
- 2 肢体不自由の状態が前号に掲げる程度に達しないもののうち、常時の医学的観察指導を必要とする程度のもの



37

2. 特別支援教育における ICF/ICF-CY活用 の実際
— 個別の教育支援計画を中心に —



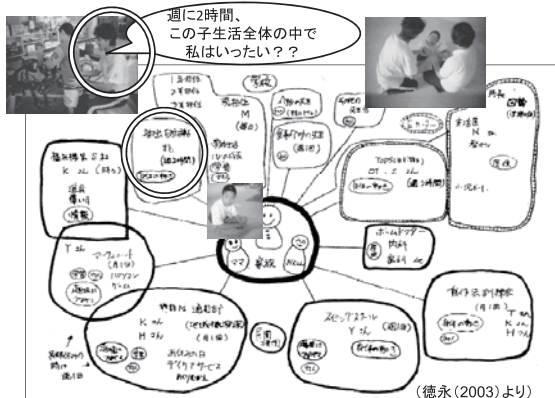
特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用の背景
～ 該当する □ にチェックを入れてみましょう！

- 「自閉ちゃん」「ダウンちゃん」という言葉に違和感を覚える。
- パニックを起こしている自閉症の子どもを見て、「自閉症だから仕方がない」と言う人に違和感を覚える。
- 教員間や関係職種間の共通理解・連携の弱さについて、問題を感じている。
- 「LDといえ、レーザーディスク」と主張したことがある。

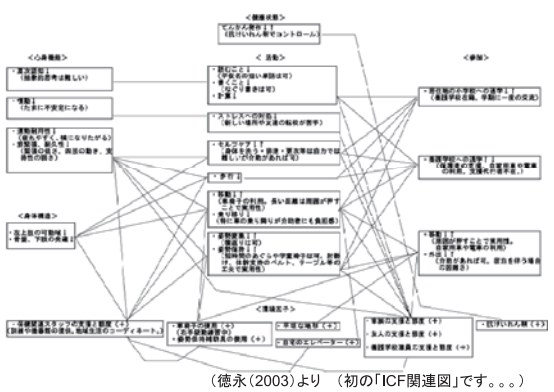
ICF/ICF-CY 活用の目的
～ 特別支援教育の中で本当に必要なのか？

- ・ 学校教育＝生活機能支援ではないはず、ということ踏まえ、どう整理するか？
- ・ ICF/ICF-CY ありき、はありえず、決して
× ICF/ICF-CY → 実践
- ・ 何らかの課題意識を持っている、或いは ICF/ICF-CY の特徴への賛同のもとで、現場の改善又は改善するための手段として位置付き、
○ 実践！ → ICF (ICF-CY)？ → 実践!!
という枠組みが重要。

では、なぜ徳永が ICF とかわり始めたか。

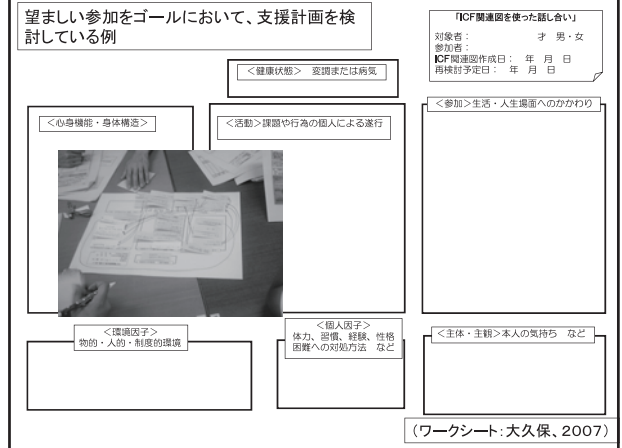


思い悩んで、やってみたこと～「ICFを使って子どもの全体像を描き、自分の役割を確認したかったとです。」



ICF/ICF-CYの活用方法の例

- 既存の情報を概念的枠組みを基にした「ICF関連図」に整理し、実態や課題について整理する方法(今回の方法)
- ICFチェックリスト等で網羅的に全体像を評価し、「ICF関連図(全体図)」で整理する方法
- 「願い」から始まり、関連する実態を整理し、支援計画作成までつなげる方法
- 「ICF関連図(部分図)」を用いて授業改善等に用いる方法
- 話し合いのツールとして? Or 資料として?



個別の教育支援計画等での活用例

(別紙資料にて)

教育でICFを活用する際の弱点??

全ての人に「参加」がある。「参加」から整理すると支援計画等が立てやすいらしい。しかし、この子の育ちを支える上での「参加」とは???



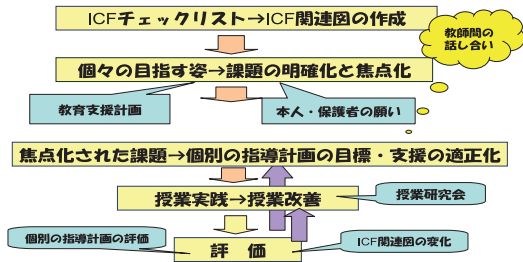
縦軸の視点はICFには含まれていない。



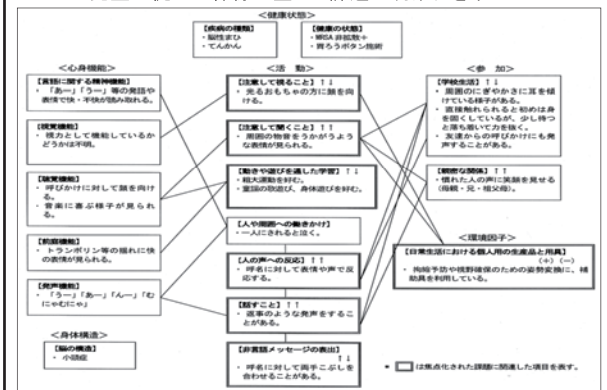
キャリア発達の視点が参考になるのではないかと??

検討中

実際の活用例～秋田県立勝平養護学校の場合 —児童生徒の全体像の整理と課題の明確化を中心に—



秋田県立勝平養護学校の場合 —児童生徒の全体像の整理と課題の明確化を中心に—



秋田県立勝平養護学校の場合
 一児童生徒の全体像の整理と課題の明確化を中心にー

(1) 成果

- ① 環境も含めた「活動と参加」という視点への気づき
- ② 連携ツールとしての有効性
- ③ ICFに関する教員間の理解

(2) 課題

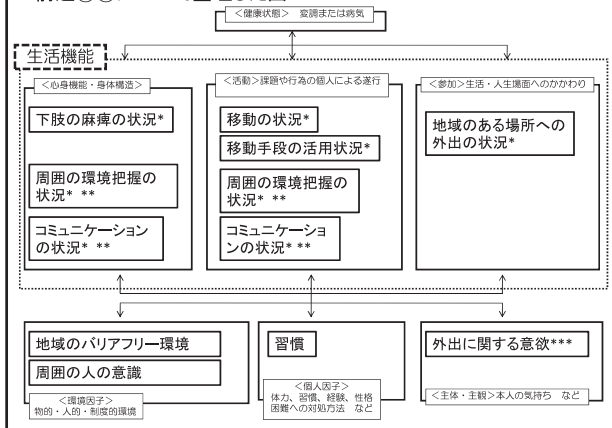
- ① 作成の効率化と作成時期の検討
- ② 本人の自己理解と参画

(参考) 自立活動解説書案についての検討

(記載事例) 下肢にまひがあり、移動が困難な児童が、地域のある場所に外出をできるようにする指導を行う際の留意点

- ① 本人のまひの状態や移動の困難にだけ目を向けるのではなく、移動手段の活用、周囲の環境の把握、コミュニケーションの状況などについて実際に行っている状況や可能性を詳細に把握すること
- ② このような生活機能と障害に加えて、本人の外出に対する意欲、習慣等や地域のバリアフリー環境、周囲の人の意識等を明らかにすること
- ③ 生活機能と障害に個人因子や環境因子がどのように関連しているのか検討すること

前述①②について整理した図



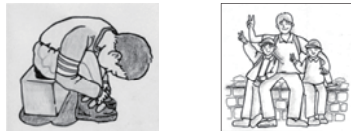
(前頁図の補足)

- 自立活動においてのみICFを活用するのではなく、また、ICFによって自立活動を規定するものでもない。
- 関連図の枠組みは大久保(2006)を元に作成))
- * 実際に行っている状況に加えて、可能性についても把握
- ** 周囲の環境把握の状況及びコミュニケーションの状況に関する内容は、「心身機能・身体構造」「活動」の双方に含まれると判断し、併記
- *** 意欲について、解説の中では個人因子として整理されているが、ここでは「主体・主観」の枠に整理

(参考) ICF/ICF-CYを巡る最近の動き

- ICF-CY(児童版)厚生労働省内の検討会等で翻訳検討～発刊へ
- 社会保障審議会統計分科会生活機能分類専門委員会でのICFの活用や普及を巡る議論の展開
- ICFのアップデートへ～@WHO国際分類ファミリーネットワーク会議
- 国立特別支援教育総合研究所でのICF-CY活用方法論、研修パッケージ開発の研究
- ICF-CY Japan Network等での様々な活動
- 特殊教育学会準備委員会企画シンポジウムの開催

最後に



徳永垂希雄

国立特別支援教育総合研究所 主任研究員

- * 専門研究A「特別支援教育におけるICF-CYに関する実証的研究(平成20～21年度)」研究代表
- * 科学研究費補助金「特別支援教育における国際生活機能分類児童青年期版活用のための研修パッケージ開発(平成20～22年度)」研究代表
- * 専門研究B「肢体不自由のある子どもの教育における教員の専門性向上に関する研究ー特別支援学校(肢体不自由)の専門性向上に向けたモデルの提案ー」研究分担者